

山口県立医学専門学校

山口県立医学専門学校の創立

明治期に県立医学校が廃止された後、県内の医学教育機関の再興はかなわないままに約60年が経過したが、次第に医師の必要性は高まり、文部省は全国各地に医学専門学校の設定を計画した。このような状況を受けて、昭和19(1944)年2月、県は県立専門学校の設定を可決した。同年4月、宇部市下宮地(現在の北琴芝)に山口県立医学専門学校(以下「山口医専」という)が設立された。なお、この年、北海道、福島、神奈川、山梨、京都、大阪、兵庫、福岡に、翌年には、秋田、奈良、和歌山、広島にそれぞれ公立医学専門学校が急造されている。

山口医専の設立にあたっては、宇部興産株式会社会長で、県医師会会長でもあった渡辺剛二(渡辺祐策の次男)の絶大な尽力があった。渡辺は、設立資金として50万円もの寄附を行い、各会社や個人有志、山口県下の医師会、歯科医師会、薬剤師会等の医療関係からも寄附を集めた。山口医専の設立資金の総額は250万円とされていることから、渡辺の寄附がいかに巨額のものであったかがうかがえる。また、山口医専の附属病院には、沖の山同仁病院、東見初病院、市立伝染病院が充てられたが、同仁病院と東見初病院は、渡辺が会長を務める宇部興産株式会社が設立した病院である。



渡辺剛二

山口医専の創立により、60年の間途絶えていた山口県の医学教育の歴史に再び灯がともされることになった。昭和20年には2期生が入学したが、4月に入学式だけが行われ、始業式は7月1日となった。講義もままならない状況の中、終戦を迎えることとなった。



旧校舎全景

もう一つの医専設立計画

昭和19(1944)年の山口医専設立の数年前、実は渡辺剛二らによって、私立医専の設立計画が立てられていた。この計画の中心人物は、渡辺剛二と沖の山同仁病院院長の水田信夫であった。

水田は田布施町に生まれ、京都帝国大学医学部を卒業。昭和14年、勤務していた京都帝大医学部を辞職し、沖の山同仁病院の院長として着任した。水田は、地元で医学校を設置する必要性を強く感じ、京都帝大医学部の内野仙治に相談するとともに、病院の経営責任者でもある渡辺にも医専設立の必要性を熱心に説いた。水田の話を理解した渡辺は、協力を惜しまず自らも設立運動の先頭に立って活動した。



水田信夫

昭和15年、渡辺は水田や小郡で医師をしていた山本辰隆と発起人となって「宇部医学専門学校設立要項」を作成し、県下の行政要員や医師会会員などに配布した。この設立要項には目的や生徒定員、学科、さらには寄附金の払込予定や経営方法や予算などが、かなり具体的に記されており、医専設立計画に対する力の入れようが見てとれる。(設立要項の詳細については、吉井善作、粟屋和彦、山口県医学教育小史(3)幻の宇部医学専門学校、山口医学、1984、Vol33、No5、p.397-407。を参照)



昭和初期の沖の山同仁病院
(『素行渡辺祐策翁』より)

しかしながら、周囲の反応は芳しくなかったようである。結局、この設立計画は実現せず、昭和19年の県立医専の設立をもって、ようやく実を結ぶこととなる。山口医専の設立にあたって、渡辺が積極的に尽力したのも、かつてかなわなかった医専設立計画があったためでもある。昭和20年、水田は同仁病院院長と山口医専の講師を兼任。昭和22年からは山口医専の専任講師として、医師の養成に尽力した。

俳人・水田のぶほ

医者として大きな功績を残した水田信夫には、俳人としての顔もあった。京都帝大医学部の師である松尾いわおに勧められ俳句と出会い、晩年には句集『二人静』を刊行。俳人の育成をはじめとし、山口県俳壇の輪を広げ、振興にも尽力した。



山口大学医学部構内にある句碑

初代校長富田雅次と建学の精神

昭和19(1944)年、山口医専の初代校長として台北帝国大学医学部教授であった富田雅次が着任した。富田校長は、知事に対し以下のような教育方針と経営計画を示した。



富田雅次校長

1. 昭和の松下村塾を建設したい。
学生訓育は学生と教師が同居し、寝食を共にすることを第1要提とする。
2. 軍人医学の速成教育を念願とし、優秀なる内外科教官を迎え外科手術と傷病手当の実習を主とし、内科診療には結核と伝染病に主力を置くこと。
3. 戦争の長期に及ぶことを思い、食糧問題の危機に備えて蛋白化学研究所を新設すること。
4. 宇部地方の産業開発に即応し産業医学研究所を新築すること。
5. 他大学に模倣することなく、常に率先して独創的計画を樹立すること。

これら諸計画遂行にあたっては、全責任は校長1人が負担すること、事務当局には常に有能な人物を差し向けること、人事問題と学生入学に関して一切外部からの干渉は受けないことを条件として、校長就任を引き受けたという。

富田校長以下、諸教授は、学生と起居を共にし、文字通り松下村塾に倣う教育を実践した。終戦後、富田校長は軍医養成校の長としての責任を取って退官した。

創立当時の教授たち



中村正二郎教授
医化学



尾曾越文亮教授
解剖学



力武一郎講師
ドイツ語



斉藤幸一郎教授
生理学



吉良貞敏教授
同仁病院から転任